

# 心理臨床に役立つ哲学的知識の必要性

長尾 博

## The Necessity of Useful Philosophical Knowledge in Practice of Psychological Clinic

This article presented main philosophical knowledge from necessity in practice of psychological clinic. The seven themes were discussed as follows. (1) philosophical ways of thinking advocated by ancient philosophers, (2) the happiness from Aristotele's point of view. (3) main views about human beings, (4) language from philosophical point of view. (5) meaning of life and purpose of living. (6) the fairness within the group from philosophical point of view. (7) the future ideal psychotherapy of Japanese clinical psychologists.

**Key Words** psychological clinic, philosophical knowledge, future ideal psychotherapy

### はじめに

本稿は、公認心理師・臨床心理士の心理臨床実践において哲学的知識の必要性を説き、心理臨床現場で直面している諸問題の解決に役立つ哲学的知識をまとめたものである。わが国の公認心理師・臨床心理士は、約3万人もいるといわれているがその資格取得過程において「哲学」という教科はあげられていない。しかし、筆者は、心理臨床実践において哲学的知識の必要性があると考え。その根拠は、次の3点があげられる。2019年2月に約半世紀を要して公認心理師が国家資格となった。この公認心理師は、心理療法<sup>1)</sup>や心理検査の実践が主である臨床心理士の職務内容に加えて他の職種との「連携」<sup>2)</sup>が主な職務内容としてあげられている(福島ら、2018)。しかし、どのような「連携」をしていく職務なのか具体的には示されていない。心を病む者や悩む者の福祉に役立つ公認心理師・臨床心理士の職務は、各ケースに応じてどのような生き方や生きる目的が望ましいのかをとらえて他の職種の者と「連携」していくことが必要ではないかと思われる。

ところで、現在、わが国が直面している心理的問題は切実な内容が多い。例えば、家族の心理的問題(DV; 内閣府2020、家族内殺人; 警察庁2020、離婚; 厚生労働省2020、児童虐待; 厚生労働省2020などの増加傾向)や児童・青年の不登校(文部科学省、2018)や青年・成人のひきこもり(内閣府2010)の増加傾向、中年期の自殺(内閣府2018)の増加傾向があげられる。

これらの心理的問題の背景には、ヒトの「生き方」や「人間関係のあり方」のあるべき「理想像」の欠如や希薄化が考えられる。「心理学」と「哲学」との相違点は、

「心理学」は、ヒトの心や行動のメカニズムの解明をねらっているが、「哲学」は、ヒトの認識、存在、世界観、言葉などについての根源的な探究をしていくという違いがある。わが国が直面している上記のような心理的問題に対して、公認心理師・臨床心理士は、心理療法や心理検査の実践を行う前にヒトの「生き方」や「人間関係のあり方」の根本原理をふまえることが重要であり、哲学的知識が必要ではないかと考える。しかし、昨今、哲学は、さまざまな理由から衰退傾向である。現代の哲学は、アメリカを中心とした言語と論理性を重視した「分析哲学」<sup>3)</sup>、19世紀のフッサール<sup>4)</sup>による「現象学」<sup>5)</sup>、それにフランスのメルロ＝ポンティ<sup>6)</sup>による「身体」を中心に「実存」<sup>7)</sup>をとらえていく立場の3派に大別できる。

一方、心理学は、さまざまな学派がある。とくにわが国では、1988年(昭和63年)に民間資格である臨床心理士が認定され、それまで「科学性」<sup>8)</sup>がないといわれ、心理学の末端に位置付けられていた「臨床心理学」<sup>9)</sup>が市民の間でにわかになら注目されてきた。しかし、「臨床心理学」における中心テーマである「心理療法」も多種多様な流派に分かれ、混乱をまねいているのが現状である。「臨床心理学」と「宗教」との関連は深く、「クライエント中心療法」<sup>10)</sup>(カウンセリング)の創始者アメリカのロジャース<sup>11)</sup>は、最初は、プロテスタントの牧師を目指しており、また、「精神分析療法」<sup>12)</sup>の創始者ウィーンのプロイド<sup>13)</sup>は、ユダヤ教信者であり、その弟子であったスイスのユング<sup>14)</sup>は、父親がプロテスタント教会の牧師であり、「ロゴセラピー」<sup>15)</sup>のランクル<sup>16)</sup>は、敬虔なカトリック信者の精神科医であった。「宗教」と「心理学」との相違点は、「宗教」は、神や仏などの絶対軸から全てをとらえ、死生観や倫理について重視しており、「心理学」は、ヒトを絶対軸からとらえず、「宗教」ほどには死生観や倫理について重視しない点がある。この「宗教」も多くの種類があるが、心理療法流派の混乱は、ヒトの心の安定をはかる方法論の混乱であり、この混乱は、ヒトの「生き方」や「人間関係のあり方」の根源が定まると落ち着くのではないかとと思われる。

以上のように公認心理師の職務としての他職種との「連携」の具体性、わが国の心理的諸問題への対応の共通基盤の探究、多種の心理療法の混乱に惑わせられない共通基盤の探究に迫られていることから、公認心理師・臨床心理士の哲学的知識の必要性があるととらえた。

筆者は、哲学の専門家ではないものの自動車免許取得のように多くの学生が公認心理師・臨床心理士の資格取得をしていく実状をみて、骨抜きの公認心理師・臨床心理士にならぬように必要最低限度の哲学の知識の必要性があるのではないかととらえた。以下に7つのテーマを選び、その哲学的知識をまとめた。

## 1、哲学的なものの考え方

臨床現場で役立てるものの考え方の哲学的知識を表1に示した。

表1 哲学的なものの考え方

哲学的なものの考え方	代表的な哲学者
(1)原点(0)に戻って考える	ソクラテス
(2)原因を分類して考える	アリストテレス
(3)絶対軸からか、相対軸からか	絶対軸(パスカル、アウグスチヌス、トマス・アキナス) vs 相対軸(プロタゴラス)
(4)経験中心か、観念(理想)中心か	経験中心(ロック、ヒューム、F・ベーコン) vs 観念中心(カント、ヘーゲル)
(5)帰納法か、演繹法か	帰納法(F・ベーコン) vs 演繹法(デカルト)
(6)AかBかの論争をして答えを出す	弁証法(ヘーゲル)
(7)構造としてとらえるか、構造ぬきでとらえるか	構造としてとらえる(レヴィ=ストロース) vs 構造ぬきでとらえる(デリダ、フッサール)
(8)実用に価値をおくか、心の流れに価値をおくか	実用主義(デューイ、ウィリアム・ジェームス) vs 心の流れをみていく(ベルグソン)

(1)について、ギリシアのソクラテス<sup>17)</sup>(BC460年頃)は、ヒトの「無知の知」、つまり、ヒトは、真理について何もわかっていないことを知って謙虚にそれを知ろうとする態度が重要であることを唱えている。この考え方から、ヒトが、何かにつまずいた時や復職、転職、転校などの「転機」<sup>18)</sup>の際、慌てずゼロに戻ってゆっくり考えていくこともよいことがあげられる。(2)について、「万学の祖」アリストテレス<sup>19)</sup>(BC3世紀頃)は、「四原因説」として、①形相因(ものごとの本質)、②資料因(ものごとの材料)、③作用因(ものごとの原因)、④目的因(ものごとの存在目的)の「分類」を唱えている。この考え方から、ヒトが仕事や人間関係などで失敗した際、さまざまな観点から「分類」して考えていくと考えが整理でき、それが次の機会に生かせることがとらえられる。(3)について、アウグスチヌス<sup>20)</sup>(400年代)は、ヒトは、本来、弱い存在であることから「神」に頼るべきであるといい、イタリアのトマス・アキナス<sup>21)</sup>(1200年代)は、ヒトにとって真理についてわからないことが多いため「神」を信じるべきであるといっている。また、パスカル<sup>22)</sup>は、「神」を信じないことよりもあらゆる面で「神」を信じたほうがよいといい、信仰を勧めている。この考え方から、ヒトが「窮地」<sup>23)</sup>に立たされた際に「神」に頼ることや「罪」を犯した際に素直に「神」に懺悔することがあげられる。一方、ギリシアのプロタゴラス<sup>24)</sup>(BC485年頃)は、「ヒトは、万物の尺度である」といい、ヒトそれぞれであるという相対論を唱えている。この考えを展開させて、「親」は「神」ではなく、次第に「親」を絶対視しなくなり「自立」していく青年の発達していく姿がとらえられ、また、他者を軸にして常に自分

と比較して劣等感に悩む者にとってヒトそれぞれの相対論を取り上げると自分なりの「生き方」を重視し始めることがとらえられる。(4)について、青年が「進路」について考えていく時や何かに悩んでいる時に自分で考え、多くの経験(アルバイトや勉強、試験を受けるなど)をして「進路」を決定したり、自分で悩みを解決したほうがよいとする「経験」優先か、あるいは先輩の話の聞いたり、「進路」ガイダンスの本を読んだり、頭で考えて「進路」を決定したり、誰かに相談して悩みを解決していくという「観念」優先かの考え方がある。時間があり、慎重なタイプであれば、カント<sup>25)</sup>(1700年代)やヘーゲル<sup>26)</sup>(1800年代)のいうドイツ観念論の立場が好ましく、時間がなく、「何事も当たって砕けろ」のタイプは、フランシス・ベーコン<sup>27)</sup>(1500年代)、ロック<sup>28)</sup>(1600年代)、ヒューム<sup>29)</sup>(1700年代)のイギリス経験論に立つのもよいであろう。(5)について、例えば、「進路」に関して、初めから医師を目指してその準備をしていく「演繹法」と、様々な能力を試した結果、医師になろうと決めていく「帰納法」とがある。「演繹法」を説いたフランスのデカルト<sup>30)</sup>(1600年代)は、「演繹法」の思考過程で1つでも不確実・不確定の点があれば、それを除外して考えるべきであるといっている。このことから、「演繹法」においては、厳密さが必要であると思われる。(6)について、例としては、不登校の中学生が登校しようとしても登校できないという葛藤があり、どちらかに決めきれず、悩んだあげく「保健室登校」をすることに決めたという過程があげられる。ヘーゲルは、ヒトの考えには矛盾があり、その矛盾を1つずつ統合していくことで高みに昇れるととらえ、この方法を「弁証法」<sup>31)</sup>と名付け、統合・解決することを「止揚」といった。しかし、精神分析療法のフロイドは、結果を引き起こす複数の原因が同時に存在する事態を「重層的決定」<sup>32)</sup>といい、ヒトがみる「夢」は、さまざまな異質な意味が組み込まれ、重層的に決定されていると解釈している。つまり、心の問題の場合、AかBかという単純な葛藤ではなく、他の要因も複雑に絡んでいることがあると説いている。(7)について、マルクス<sup>33)</sup>の労働者対資本家の観点からの経済学、心理現象を全体的にみていこうとするゲシュタルト心理学<sup>34)</sup>、ソシュール<sup>35)</sup>の「差異」機能を重視する言語学、フロイドの心を自我、エス、超自我によってとらえる精神分析などは、ものごとを「構造」としてとらえる見方であり、未開の地のフィールドワークから優れた文化を発見したレヴィ=ストロース<sup>36)</sup>は、「構造主義」を唱えた。「構造主義」とは、事物や現象を「構造」(枠にはめて)としてみていく考え方をいう。一方、1800年代にフランスのフッサールは、枠にはめず「事象そのもの」をとらえる現象学を唱え、20世紀には、デリダ<sup>37)</sup>が、個人の見方(解釈)によって全てが異なるという「脱構築」<sup>38)</sup>を唱えてから「ポスト構造主義」<sup>39)</sup>が登場している。ヒトや事物を「構造」としてみていくか、それともそのもの、そのままをみていくかの違いの例は、初めて自分にとって重要であると思われる他者と会う際、前もってその人の情報を得た(枠をつけて)うえで会うか、それとも何も先入観をもたずに(枠抜きで)そのまま合うかの違いの例がある。また、心理療法でクライアントを診断<sup>40)</sup>していく目でとらえたり、心理テストという枠からとらえるか、それともロジャースがいうように価値観を加えず、無条件<sup>41)</sup>でクライアントと関わるかの例がある。どちらも一長一短があると思われる。(8)について、ヒトが何に価値を置くかは、その人のものの考え方に大きく影響する。アメリカは、とくに目に見える実用性に価値を置く国家である。その歴史として、1910年にウィリアム・ジェームズ<sup>42)</sup>が、機能主義心理学<sup>43)</sup>を唱え、その影響を受けてデューイ<sup>44)</sup>が、1916年に実生活に役立つ教育哲学を唱え

た。わが国もアメリカの影響を受けてこのプラグマティズム<sup>45)</sup>が浸透している。一方、目に見えない心の豊かさに価値を置く立場もある。例えば、19世紀のフランスのベルグソン<sup>46)</sup>は、現実外界を直観を介してとらえ、それを「イメージ」化して記憶していく心の流れに価値を置いている。実用性か、心の豊かさかに価値を置くかの違いは、例えば、大学生が、ある資格が取れるからその大学に入学する例と楽しい大学生活を送りたいからその大学に入学する例の違いや、心理療法で症状や問題行動の除去をねらうかそれとも人間関係を改めて自分らしさを発見していくかをねらうかの違いの例があげられる。

## 2、「幸福感」について

「幸福感」について、心理学では「主観的幸福感」、well-being、QOL(生活の質)などの語を用いることが多い。紀元前3世紀のギリシアでは、アンティステネス<sup>47)</sup>を代表とするキニコス派は、幸せとは何も持たないことといい、ゼノン<sup>48)</sup>を代表とするストア派は、理性によって禁欲できれば幸せになれるといい、エピキュロス<sup>49)</sup>は、生理的安定性(衣食住)と友愛があれば幸せであるといっている。仏教でも「煩惱」<sup>50)</sup>の執着心を戒め、「煩惱」の強さが不幸や悩みをまねくといっている。

また、アリストテレスは、ヒトの生き方には「政治的」、「享乐的」、「観照的」(じっくり考える生き方)の3つがあるとし、とくに「観照的」生き方が「幸福感」をまねくといっている。彼は、全てに「中庸」<sup>51)</sup>(程よい状態)を保つ習慣が、「幸福感」であるといっている。つまり、自分や本質を見つめて、ほどほどの満足を感じることが「幸福感」であるととらえている。

## 3、人間観について

人間観については、人間の数だけあると考えられるが、大まかに分類すると次の5点があげられる。(1)知性・理性説；17世紀のフランスのパスカルは、「ヒトは、考える葦である」といい、18世紀のカントは、「人格者とは、道徳観のある人」といい、フランシス・ベーコンは、「知は、力なり」といっている。(2)性善説；中国の孟子に始まる。人間の本性は、善であるのとらえる。クライエント中心療法のロジャースは、カウンセラーに自己開示<sup>52)</sup>していけば、本当の自分に気づき、自己実現<sup>53)</sup>できるといっている。(3)性悪説；中国の荀子に始まる。精神分析療法のフロイドは、ヒトの無意識世界には邪悪な欲望<sup>54)</sup>が潜伏しており、それをヒトは理性によって処しているといっている。(4)学習説；1913年にアメリカの心理学者ワトソンが、それまでの内省的心理学を否定し、行動の科学<sup>55)</sup>を唱え、ヒトの行動の学習を強調している。(5)社会構成主義説<sup>56)</sup>；19世紀のフランスの社会学者デュルケム<sup>57)</sup>に始まり、1960年代からアメリカで波及した考え方である。人間関係が現実をつくっているというとらえ方をいう。心理療法では、オーストラリアのホワイトとエプストンの「ナラティブ・セラピー」<sup>58)</sup>がある。

## 4、言葉の哲学について

20世紀になって言葉の哲学が、展開していった。例えば、言葉のもつ価値体系について「近代言語学の祖」といわれるソシュールが取り上げ、ヴィットゲンシュタイン<sup>59)</sup>は、日常生活で用いる言葉と生活形式の関係や言葉と言葉が織り込まれた諸活動の総体を「言語

ゲーム」とよび、意味の文脈依存を唱えた。また、フランスのラカン<sup>60)</sup>は、現実界、象徴界、想像界の3つの自我領域に分け、言葉の象徴界への参入は自己を形成し、自己と他者の心理的区分を明確にするといった。また、スイスの心理学者ピアジェ<sup>61)</sup>は、幼児の独り言に注目し、ロシアのヴィッゴツキー<sup>62)</sup>は、幼児期の「内言」から「外言」への移行期を明らかにしている。このような結果を参考にして、臨床実践に役立てるには、クライアントが何度も同じことを言う場合、そのクライアントはその言葉のもつ内容に価値を置いているのであろうと想像でき(ソシュール)、話す言葉の特徴から、クライアントの日常生活が連想でき(ヴィットゲンシュタイン)、心理療法における会話によって治療者とクライアントとの違いや自己が明らかにされ(ラカン)、幼児の言葉から「社会性」<sup>63)</sup>の発達の程度がとらえられること(ピアジェとヴィッゴツキー)に注目すべきであろう。

## 5、生きる意味とその目的の哲学について

表2に生きる意味とその目的を唱えた代表的な哲学者をまとめた。

表2 生きる意味とその目的

生きる意味とその目的	代表的哲学者
① 窮地状況から「今」を充実して生きる	ヤスパース、ハイデッガー、キルケゴール
② 最後まで生きてみる	サルトル
③ 「不条理」と闘って生きる	カミュ、ニーチェ
④ 人格者として生きる	カント
⑤ 生きている実感を身体イメージでつかむ	メルロ＝ポンティ
⑥ 目的をもって生きる	フッサール、ブレンターノ
⑦ 社会に役立つ人間になる	デューイ
⑧ 他者のために生きていく責任がある	レヴィナス

①について、ドイツのヤスパース<sup>64)</sup>は、「実存解明」(他者に心を開く)、「限界状況」(挫折して自己存在の意義に気づく)、「絶対的意識」(神の言葉を聞いて自己存在の確信をもつ)という観点から、生きる意味が確認できるといい、また、ハイデッガー<sup>65)</sup>は、「今」を生きることを「実存」といい、ヒトは、「死」を自覚して人間になると説き、ただ生きるだけのdas man<sup>66)</sup>でなく、現実世界に自分を投げ入れる(投企)ことを強調した。また、19世紀のデンマークのキルケゴール<sup>67)</sup>は、ヒトにとって命を懸けれるものが「真理」であるといい、本来、なるべき自分を「実存」ととらえた。①で述べた生きる意味については、das manの多い現代のわが国では「窮地」にたつヒトは少ないためにインパクトを与えないが、「ホスピス」<sup>68)</sup>(終末期ケア)においては参考になる内容である。②について、フランスのサルトル<sup>69)</sup>は、ヒトは、「実存」が先で「本質」は後に来るといい、また、誰でも自己の存在理由を自由に作れるといった。また、彼は、ヒトは、いつも「自由の刑」にさらされており、価値を選ぶ「決断」に迫られていて、「今」を大切に生きる「自己責任」があると説いている。②で述べた内容は、主体性が乏しい日本人には、存在理由を自由に作れるという意味について理解しにくいであろうが、生きることの自己責任・決断は、民主主義国家

においては重要であり、行き詰まっている者に最後まで生きてみないと生きていく意味がわからないことを説くためには役立つ考え方である。③について、フランスのカミュ<sup>70)</sup>は、ヒトが「不条理」<sup>71)</sup> 事態に直面した際、(1)「神」を信じるか、(2)自殺するか、(3)「不条理」と闘うかの3通りをあげている。また、「神は死んだ」といったドイツのニーチェ<sup>72)</sup>は、「ルサンチマン」<sup>73)</sup> (弱者の強者への怒りや妬み)をもつべきでなく、「力への意志」をもって「超人」<sup>74)</sup> (強者)に近づく努力をすべきであると説いている。このようにこの世の矛盾と「闘っていく」人生もある。ヒトが挫折した際、もう一度、息を吹き返すにはこのような生き方が参考になる。④について、18世紀のカントは、人格者(立派な人間)とは、道徳を正しく知り、実践する人と定義している。カントのいう道徳とは、命令や義務によらず、自発的で利得感情のない純粋な道徳であり、理性にもとづくものである。反社会的な考えや行為をする者にとっては、この生き方や人生の意味は、教育的内容をふくんでいゝる。⑤について、20世紀のメルロ＝ポンティは、「身体」のもつ意識的に動かせる特徴と無意識的に反応する特徴に注目して「身体図式」(身体イメージ)を取り上げ、「身体」が世界や意識をつくっているといった。「心」のみでなく「身体」の実存を取り上げている点に独自性がある。この考え方は、無気力で生きている実感が乏しい者にとってスポーツや「身体」を用いた運動を行うことは、生きている実感や生きがいを生むのではないかと思われる。⑥について、19世紀の現象学のフッサールは、ヒトの意識の「志向性」<sup>75)</sup> (外界に目を向けること)に注目し、現象をとらえるには意識の「志向性」が重要であるといった。つまり、ヒトが悩んだり、考えている時、「～について」と焦点を絞って悩んだり、考えることが重要であることを示唆している。フッサールの師のオーストリアのブレンターノ<sup>76)</sup>は、目的をもった「志向性」を説いている。今日、無気力な青年が多いなか、人生に目的をもつ生き方は、この「志向性」というとらえ方が参考になると思われる。⑦について、20世紀のアメリカのデューイによるプラグマティズムにもとづく教育哲学が影響している。今日、社会的資格をもって社会に役立つ人間になるという教育は広く波及している。このようなアメリカにおける1970年代から生じた「キャリ教育」<sup>77)</sup>は、21世紀になってわが国に反映してきた。また、アメリカでの1930年代から始まる当たり前のことを疑い、論理的に考え「最適解」を求める「クリティカルシンキング」<sup>78)</sup>もこのデューイ哲学の影響が強い。⑧について、リトアニアのレヴィナス<sup>79)</sup>は、フランス語の「～がある」という意味の「イリア」<sup>80)</sup>に注目し、我々が死んでも存在する(イリア)他者・外界を重視し、確かなのは、今、生きている「私」とわからない「他者・外界」の存在であるから「他者・外界」との関係性を維持する必要性を説いている。つまり、我々は、他者・外界の存在なしでは生きていけないといっている。この考えは、わが国では、ひきこもってひとりよがりには生きている青年もいるなか、他者・外界と関わりをもつことの人間性について考えさせられる。

## 6、集団内の公平生について

公平性 (fairness) とは、判断や処理などが偏っていないことをいう。一方、平等性 (equality) とは、皆が同じであることをいい、公平性は、それぞれのメンバーの違いがわかったうえで偏らない共通性を打ち出すことをいう。企業や学校、あるいはサークルな

どの集団活動において、また、民主主義国家において公平性は、重要な概念である。アリストテレスは、ヒトの本性は、ポリス的存在であるといったが、イギリスのホブズ<sup>81)</sup>は、17世紀に国家にルールがなければ、「万人の万人による闘争」が生じることをあげ、統治者と市民との社会契約の必要性を説いた。しかし、この契約内容に公平性がなければ、ヒトラーやスターリンが行ったような「全体主義」国家となりやすい。ドイツのエーリッヒ・フロム<sup>82)</sup>は、「全体主義」<sup>83)</sup>国家は、市民の「自由」を奪うといい、ハンナ・アーレント<sup>84)</sup>は、「凡庸な悪」(平凡な人が抱く悪)から残酷な「全体主義」となっていく危険性をあげている。とくにわが国は、集団主義傾向が強く、学校での「集団いじめ」や反社会的勢力による犯罪、閥や徒党を組んだ闇の人事<sup>85)</sup>など公平性や正義を欠いた問題は多い。公認心理師も約3万人もいることから、将来、特定の心理療法流派による政治的集団にならぬことを願っている。アメリカのロールズ<sup>86)</sup>は、貧困、人種、性別、才能などを隠す「無知のヴェール」<sup>87)</sup>からみた公平さを取り上げ、公正な手続きを経た「自由主義」を唱えた。また、アメリカのサンデル<sup>88)</sup>は、個人の自由をふまえた「共同体」の価値や道徳を重視する「コミュニタリアズム」(共同体主義)を唱えている。また、ドイツのハーバーマス<sup>89)</sup>は、国家に頼らず、市民自らによる「公共性論」を唱え、NPOやボランティア活動の推進を叫んだ。彼のコミュニケーションの方法は、①メンバーが対等であること、②同じ言葉を用いること、③事実を信じることの3点をあげている。

## 7、わが国の心理士としてのアイデンティティ形成と今後の理想の心理療法

### (1) 心理士としてのアイデンティティ形成について

以下にいう心理士とは、公認心理師・臨床心理士のことをいう。今後のわが国の心理士のアイデンティティ<sup>90)</sup>の形成のために医師とは異なる職務内容をあげる観点として、①心身二元論か、心身一如か、②精神と心理の違いの2点から考えてみたい。①についての歴史は、紀元前のプラトンが、心が身体を支配していることをあげ、その後、アリストテレスは、心身の結合を取り上げた。17世紀になってフランスのデカルトが心身平行説を唱え、心と身体は相互作用があるものの別個な組織であるとし、「松果体」<sup>91)</sup>が相互作用を司っているといった。この心身平行説は、現代の西洋医学に受け継がれている。

しかし、漢方医学や仏教では、「心身一如」という見解が長く支持されている。1950年代にアメリカで台頭してきた「トランスパーソナル心理学」<sup>92)</sup>のなかで「心身一如」にもとづく心理療法があり、1979年にジョン・カバット・ジン<sup>93)</sup>が創始した「マインドフルネス」<sup>94)</sup>もその1つである。この療法は、瞑想などで心身はあるがままに受容することをねらいとしている。西洋医学中心の医師とは異なる心理士が行う独自の心理療法として、この「心身一如」にもとづく療法を展開していくことがこれからの心理士のアイデンティティ形成につながるのではなかろうか。

また、②の歴史について、英語で「心」という語は、mind, soul, spirit など多くある。今日ではmindが一般的になっている。ドイツ語では、身体(Körper)に対して精神(Geist)、心(Seele)に対して肉体(Leib)があり、精神と心(心理)の区分がある。1929年にクラークス<sup>95)</sup>は、「心の敵対者として精神がある」といい、ロゴセラピーのランクルも心因性ノイローゼと精神性ノイローゼを区別している。彼らのいう心(心理)と



は、フロイドのいう自我 (ego)、つまり意識水準の知、情、意のことであり、精神とは、ユングのいう自己 (self)、つまり無意識世界にある本当の自分を意味する。したがって、医師の場合、患者の意識水準の心 (心理) に対して、薬物療法や「ムンテラ」<sup>96)</sup> によって治療が可能である一方、心理士の場合には、今後、その独自性をもつためには無意識世界にある本当の自己である「精神」に焦点を当てて治療することが望ましいのではないかと考える。

このように今後、医師とは異なる心理士のアイデンティティを形成していくには、「心身一如」にもとづいてクライアントの無意識水準の「精神」に働きかける心理療法ができる心理士を目指すべきではないかと考える。

## (2) 今後の理想の心理療法

現在のわが国の心理臨床界は、心理療法の実践に関しては、認知行動療法や動作訓練が主流をなし、臨床心理学は、臨床経験よりも科学的「根拠」(evidence) を重視している。筆者は、科学的「根拠」も重要であるが、研究よりも心理臨床実践を、つまり多くのクライアントが心理療法によって「治ること」<sup>97)</sup>、「変化すること」を重視している。公認心理士・臨床心理士に将来なりたいという高校生は、認知行動療法や動作訓練を行いためになりたいのではなく、おそらくヒトの行動以外の心理を知りたいためやクライアントと心理的関りをもちたいことを主眼としているのではなかろうか。このようなことを前提として、以下に5つのテーマを設けて筆者が考える将来の心理士が行う理想の心理療法像を提案したい。

① クライアントの心の「理解」か、クライアントの症状・問題行動の「説明」か；19世紀のデュルタイ<sup>98)</sup> は、精神科学の方法論として他者(患者)の症状や問題行動の意味を「理解」(Verstehen) する方法と自然科学的方法を用いて他者(患者)の症状や問題行動の因果関係を「説明」(Erklärung) する方法をあげた。前者の療法は、クライアント中心療法や精神分析療法、ユングの分析心理学的心理療法<sup>99)</sup> などがあげられ、後者の療法は、行動療法、認知行動療法、動作訓練などがあげられる。今日、後者の療法が注目を集めているが、その理論的背景には、既述したアメリカのワトソンの行動主義や19世紀のフランスのコント<sup>100)</sup> による実証主義がある。ワトソンの行動主義は、主体となる自己については除去され、コントの実証主義も「形而上学」<sup>101)</sup> (自己存在について考える学問) 抜きのとらえ方に問題があるととらえる。また、アメリカの社会理学者のガーゲン<sup>102)</sup> は、社会構成主義の台頭によってこれまでの行動主義の社会心理学の危機を投げかけている。このような点を考慮して将来の心理士は、行動や動作を扱う療法よりも心を扱い、心と関わっていく前者のクライアントの心を「理解」していく療法が望まれる。② 症状除去・問題の解決をねらうか、無意識もふくめた根治療法をねらうか；①の内容と同じくするが、行動療法や認知行動療法は、クライアントの意識水準をねらった症状や問題行動を除去するという対症療法である。一方、無意識水準を扱う精神分析療法や分析心理学的心理療法は、精神内界の変化をねらった根治療法である。この無意識については、現在でもわからない点が多いといわれている。1774年にドイツのメスメルが、最初に催眠術を行い、この催眠は「動物磁気」<sup>103)</sup> の作用といったが、イギリスのブレイド<sup>104)</sup> が、1843年に「暗示」による催眠療法であると修正した。その後、フランスの心理学者ジャネ<sup>105)</sup>

は、憑依、自動書記、カタレプシー、多重人格などの無意識の作用を研究し、医師のシャルコー<sup>106)</sup>は、「ヒステリー」<sup>107)</sup>患者の無意識の影響力を明らかにした。しかし、今日に至っても無意識についての科学的解明はなされていない。このことから今後、無意識をふくめた心理療法の展開が望まれる。③クライアントに対して治療者は、中立的であるべきか、個性を表現すべきか；アメリカの精神科医サリヴァン<sup>108)</sup>は、心理療法において治療者の「関与しながらの観察」<sup>109)</sup>という態度を重視している。フロイドは、白紙のスクリーンとしての治療者からクライアントは、裸の自分が明らかにされるととらえ、治療者の中立性を重視している。一方、サリヴァンは、「同種の者は、同種の者によって治療される」と述べ、治療者の個性に注目し、わが国の黒田<sup>110)</sup>は、心理療法中に治療者の側も「主体的変容認識」<sup>111)</sup>とあって治療者自身もなんらかの変化が生じることをあげている。今日、フロイドのいう治療者の中立性を維持する標準型精神分析療法を行う治療者も少ないことから、今後は、治療者とクライアントとの相性や治療者の個性を活用した心理療法に傾くのではないかと思われる。その際、ソクラテスが「汝自身を知れ」といったように治療者は、自分の個性や心理療法中の自己の変化を知っておく必要がある。④「現実世界」を一元的にとらえるか、多元的にとらえるか；フロイドは、「現実世界」を客観的現実と心的現実<sup>112)</sup>とに分け、治療ではクライアントが独自にとらえる心的現実を扱った。クライアントの社会適応<sup>113)</sup>をねらうとすれば、一元的な心的現実から客観的現実へ結びつけることが重要であり、他方、行動療法や認知行動療法は、初めから客観的現実のみを扱っているという特徴がある。一方、ユングの分析心理学的心理療法では、無意識にある本当の自分である自己の実現を目指して「元型」<sup>114)</sup>という多元的自己（例えば、アニマ、アニムス、グレートマザーなど）を表現していく。このように無意識にある自己の実現をねらうとすれば多元的元型を表現することが望ましいが、クライアントの社会適応を重視し、この点を治療方針とすれば現実を心的現実中心に一元的にとらえる精神分析療法が望ましいであろう。⑤臨床経験を重視するか、科学的根拠を重視するか；今世紀に入って、医学では「根拠のある診断や治療」(EBM<sup>115)</sup>;evidence based medicine)が叫ばれこれに倣い臨床心理学においても「科学的根拠」を重視するようになった。それ以前は、前田<sup>116)</sup>が「心理療法は、経験が7分で理論(読書)が3分」といったように臨床経験が重視されていた。臨床心理学で「科学的根拠」を重視するようになったのは先進国の傾向であるが、とくにわが国において今世紀になってこの傾向が強くなった背景には、わが国の臨床心理学専攻の大学教員の多くは、以前は小・中・高校の教師や実証・実験心理学専攻<sup>117)</sup>の者が多いことや、公認心理師が国家資格となる条件として、医師からの公認心理師による増加傾向のある「うつ病」患者に対しての認知行動療法の実践の期待が考えられる。しかし、長い臨床経験を経て患者とのラポール形成や関りの継続ができる心理療法を習得した心理士でなければ真の認知行動療法はできないという現実がある。哲学者カントは、「明証」と名付けてヒトの経験的な考察が正しいかどうかについての「根拠」は「直観」によって明らかにされると述べている。また、グリェンバウム<sup>118)</sup>によれば、フロイドの精神分析療法に対する態度は「帰納法」的科学的態度であるといい、統計的検定をしなかった点に問題があるといっている。このような点をふまえて、わが国の全ての心理士が、一斉に「科学的根拠」の重視を唱える前にもう一度、臨床実践の基礎となる「臨床経験」について考え、重視していくべきではなかろうか。

## おわりに

以上、心理士に必要と思われる哲学的知識と今後のわが国の心理士に望まれる心理療法について述べてきたが、その内容は、時代錯誤であるとか、ユートピアであるという批判を受けるであろう。しかし、今後、AI 時代を迎えることから、ヒトの心と直接、関わる心理臨床の仕事はさらに注目され、これから長い時間をかけて上記の理想像が実現されるのではなかろうか。ライブニッツ<sup>119)</sup>が、論理的に想定可能な世界を「可能世界」といったがこの「可能世界」<sup>120)</sup>の実現には、偶然性、必然性、可能性といった諸概念が関係しているという。筆者は、必然性を強調した。既述したような心理臨床界の問題と理想像があるものの、当面は、わが国において、現在、直面している①GGI (gender gap index) が、世界で110位(世界経済フォーラム、2018)、②東京大学の学力順位が世界で42位(タイムズハイヤーエデュケーション、2019)、③わが国の国民の幸福度が、世界で58位(国際連合、2020)であるという現実にとりかかるといえるであろう。

本稿の内容について筆者が哲学の専門家ではないこともあり、内容が大味であり、専門的に間違った記述が多くあるかもしれない。この点は、お笑い、ジャニーズジュニア、巨人は、なぜソフトバンクに勝てないのかに関心をもち、政治家のウソに慣れてしまっている「浮世」に住む者のひとりとしてお許し願いたい。

## 参 考 文 献

(アーレント・H. )

大久保和郎(編訳) 1969 「イエルサレムのアイヒマン」みすず書房

(アリストテレス)

山本光夫編 1968-1973 「アリストテレス全集」岩波書店

(アウグスチヌス、A. )

服部栄次郎・藤本雄三訳 1982-1991 「神の国 1-5」岩波文庫

(アンティステネス、A. )

山川偉也 1993 「古代ギリシアの思想」講談社学術文庫

(ベーコン・F. )

渡辺義雄訳 1983 「ベーコン随想集」岩波書店

(ベルグソン、H-L)

平井啓介ら訳 1993 「ベルグソン全集 1-9」白水社

(ブレイド、J)

1843 *Neurypnology or the rationale of nervous sleep.* London ; John Churchil.

(ブレンターノ、F. )

細谷恒夫編 1970 「世界の名著 51」中央公論社

(カミュ、A. )

佐藤朔・高島正明編訳 1972 「カミュ全集 2 シーシュポスの神話」新潮社

(コント、A. )

田辺寿利 1938 「実証的精神論」岩波文庫

- (デカルト、R. )  
野田又夫編 1977「世界の思想家 デカルト」平凡社  
(デリダ、J)  
宮崎裕助 2020「ジャック・デリダ」岩波書店  
(デューイ、J)  
宮原誠一訳 2005「学校と社会」岩波書店  
(デュルタイ、W. )  
尾形良助訳 1981「精神科学における歴史的世界の構成」以文社  
(デュルケーム、E. )  
佐々木交賢訳 1982「教育と社会学」誠信書房  
(エピキュロス)  
日下部吉信 1981「西洋古代哲学史」昭和堂  
(福島哲夫ら) 2018「公認心理師」学研  
(フロイド、S. )  
2012-2020「フロイト全集 1-22」岩波書店  
(フランクル、V. E. )  
池田香代子訳 2002「夜と霧」みすず書房  
(フロム、E. S. )  
日高六郎 1941「自由からの逃走」創元社  
(ガーゲン、K. J. )  
杉万俊夫ら監訳 1998「もう1つの社会心理学」ナカニシヤ出版  
(グリェンバウム、A. )  
村田純一ら訳 1996「精神分析の基礎」産業図書  
(ハーバーマス、J. )  
細谷貞雄・山田正行訳 1973「公共性の構造転換」未来社  
(ハイデッガー、M. )  
轟孝夫 2017「ハイデッガー、存在と時間入門」講談社現代新書  
(ヘーゲル、G. W. F)  
熊野純彦訳 2018「精神現象学上・下」ちくま学芸文庫  
(ホッブズ、T. )  
水田洋訳 1992「リヴァイアサン1-4」岩波文庫  
(ヒューム、D. )  
木曾好能訳 2019「人間本性論」法政大学出版局  
(フッサール、E. )  
長谷川宏訳 1997「現象学の理念」作品社  
  
(ウイリアム・ジェームズ)  
梶田啓三郎訳 2010「プラグマティズム」岩波文庫  
(ジャネ、P. )  
松本雅彦訳 1982「心理学的医学」みすず書房

(ヤスパース、K. T. )  
草薙正夫 1962 「実存哲学の根本問題 現代におけるヤスパース哲学の意義」 創文社  
(ユング、C. G. )  
高橋義孝ら訳 1970 「ユング著作集 1-5」 日本教文社  
(カント、I. )  
有福孝岳ら訳 2012-2020 「カント全集 1-22」 岩波書店  
(警察庁)  
2020 平成 30 年度 犯罪統計  
(キルケゴール)  
榊田啓三郎編 1904-1990 「キルケゴール全集」 筑摩書房  
(クラークス、L. )  
赤田豊治訳 1992 「性格学の基礎」 うぶすな書院  
(厚生労働省)  
2020 「人口動態統計；離婚数」  
2020 「平成 30 年度 児童虐待相談対応件数」  
(黒田正典)  
1980 Three types of science. Leipzig ; International Congress Psychology.  
(ラカン、J. M. E. )  
小出浩之ら訳 2020 「精神分析の四基本概念 上・下」 岩波文庫  
(ライプニッツ、G. W. )  
石黒ひで 2003 「ライプニッツの哲学」 岩波書店  
(レヴィ＝ストロース、C. )  
大橋保夫訳 1976 「野生の思考」 みすず書房  
(レヴィナス、E. )  
合田正人訳 1989 「全体性と無限」 国文社  
(前田重治)  
1978 「心理療法の進め方」 創元社  
(マルクス、K. )  
中山元夫訳 2007 「マルクスの資本論」 ポプラ社  
(メルロ＝ポンティ、M. )  
中島盛夫訳 1982 「知覚の現象学」 法政大学出版局  
(メスマル、F. A. )  
吉永進一郎訳 1992 「動物磁気の発見についての回想」 春秋社  
(文部科学省)  
2020 「平成 30 年度 児童生徒の問題行動・不登校生徒等指導上の諸課題に関する調査」  
  
(内閣府)  
2018 「平成 27 年度自殺対策白書」  
2010 「生活状況に関する調査；ひきこもりの数」  
2020 「男女共同参画局；DV の数」

- (ニーチェ、F. W. )  
生田長江訳 1911 「ツァラトゥストラはこう語った」 新潮社  
(パスカル、B. )  
前田陽一・由木康訳 2018 「パンセ」 中公文庫  
(ピアジェ、J. )  
岸田秀・滝沢武久訳 1971 「哲学の知恵と幻想」 みすず書房  
(プラトン)  
田中美知太郎・藤沢令夫監修 1974-1978 「プラトン全集」 岩波書店  
(プロタゴラス)  
藤沢令夫 1988 「プラトン、プロタゴラス、ソフィストたち」 岩波文庫  
(ロールズ、J. B. )  
川本隆史・福岡聡・神島裕子訳 2010 「正義論」 紀伊國屋書店  
(ロック、J. )  
大槻春彦訳 1972-1974 「人間悟性論」 岩波文庫  
(ロジャース、C. R. )  
1980-1985 「ロージャズ全集 全 23 巻」 岩崎学術出版  
(サンデル、M. )  
菊池理夫訳 1998 「自由主義と正義の限界」 三嶺書房  
(サルトル、J. P. )  
松浪信三郎訳 1957 「サルトル全集 18、19、20 存在と無」 人文書院  
(ソシュール、F. )  
町田健訳 2016 「新訳ソシュール 一般言語学講義」 研究社  
(ソクラテス)  
納富信留訳 2012 「ソクラテスの弁明」 光文社古典文庫  
(サリヴァン、H. S. )  
中井久夫ら訳 1995 「分裂病は人間的過程である」 みすず書房  
(トマス・アキナス)  
山田晶訳 2014 「神学大全 1、2」 中央公論社  
(ヴィッゴツキー、L. S. )  
柴田義松訳 1970 「精神発達の理論」 明治図書  
(ワトソン、J. B. )  
1913 Psychology as the behaviorist views it . Psychological Review, 20, 158-177.  
(ホワイト、M. & エプストン、D.)  
小森康永訳 2017 「物語としての家族」 金剛出版  
(ヴィットゲンシュタイン、L.)  
藤本隆志訳 1976 「ヴィットゲンシュタイン全集 8」 大修館書店  
(ゼノン)  
加來彰俊訳 1994 ラエルティオス 「ギリシア哲学者列伝 下」 岩波書店  
(ジン、J. K.)  
春木豊訳 2007 「マインドフルネスストレス低減法」 北大路書房

## 注

- 1) 心理療法；心の治療法をいう。医師が行う場合、精神療法といい、心理士が行う場合、心理療法という。支持、表現、訓練、洞察の4つの基本要因で構成される。
- 2) 連携；学校では、スクールカウンセラーの他教師や治療機関との連携をいい、病院では、心理士の医師、看護師、作業療法士、ケースワーカーとの連携をいう。
- 3) 分析哲学；20世紀に英米で言語という現象を軸としてヴィットゲンシュタインらが、論理実証主義を唱えたことに始まる。言葉を論理的に分析することによって現実世界との対応を確認するという考え方をいう。
- 4) フッサール；(1859-1938)ドイツの哲学者。「事象そのものへ」という「現象学」を唱えた。意識と対象は、相関関係があることを前提にしている。
- 5) 現象学；フッサールに始まる哲学。物理学のマッハの影響を受けている。現象学は、ヤスパーズ、サルトル、ハイデッガー、メルロ＝ポンティに影響を与えた。
- 6) メルロ＝ポンティ；(1908-1961)フランスの哲学者。身体は、それ自身であり、対象でもあるという「両義性」を指摘した。
- 7) 実存；今、なぜ自分がここに「存在」しているのかを問う哲学を「実存哲学」という。「・・・である」という現実存在を「実存」といい、「・・・がある」という本質存在とは区別する。ヘーゲルは、「神」が個々の存在や個性や偶然性を生み、必然的な自己へと展開するといったが、キルケゴールは、事実存在に重きを置く実存哲学を唱えた。
- 8) 科学性；「客観性」（第3者にもわかる事象の説明）、「普遍性」（いつでも、どこでも共通して生じる事象の説明）、「再現性」（もう一度同じことを行って同じことが生じる事象やその説明）をいう。臨床心理学の「ケース研究」は、この3点が実証できないために「心理学」の末端に置かれている。
- 9) 臨床心理学；心の問題や悩みをもつ者（不適応者）に対して支援、回復、予防を目指し、その研究をする心理学。アメリカのウィットマーが、1896年に最初に「心理クリニック」を開業したことに始まるといわれている。わが国において、以前は、「臨床心理学」は、科学性がないことから「心理学」をあきらめた者の道として取り扱われたが、臨床心理士の資格ができると「心理学」の中心であるかのように市民はとらえ出した。
- 10) クライアント中心療法；ロジャースが創案した心理療法。非指示的カウンセリングとも呼ばれる。通常、「カウンセリング」といわれる。日本人は、「カウンセリング」を「アドバイス」をすることととらえている。
- 11) ロジャース；(1902-1987)アメリカの臨床心理学者。農学部を卒業し、臨床心理学を始めた。診断無用論や「傾聴」の重要性を唱えた。のちに「エンカウンターグループ」を展開させた。
- 12) 精神分析療法；ウイーンの医師フロイドが始めた心理療法。クライアント（患者）の無意識の意識化を目指す療法。弟子にユング、アドラー、ライヒ、ランクなどがいた。弟子によって多くの分派が生じた。理論、用語が難しく、治療者の養成に時間がかかることからわが国では、この療法を専攻する者は少ない。
- 13) フロイド；(1856-1939)ウイーンの精神分析療法の創始者。心の問題の幼児期決定論、自我、エス（無意識の本能）、超自我（良心・道徳心）による心の構造論、リビドーの発達論を唱え、患者の無意識内容を「解釈」し、「洞察」を目指す療法を開発した。「エスあるところにエゴ（自我）あらしめよ」といった。

- 14) ユング；(1875－1961)スイスの医師。分析心理学的心理療法の創始者。フロイドがいう邪悪な内容の無意識世界に反対し、能動的想像的な無意識内容の「元型」をあげ、時間と空間を超えた普遍の無意識である「集合的無意識」を唱えた。彼は、無意識世界に本当の自分である「自己」が潜伏しており、日常の意識できる自分である「自我」と区別をし、表現をすることによって「自己」が実現されるといった。わが国では、河合隼雄によってユング心理学が紹介された。
- 15) ログセラピー；「実存分析」ともいう。「生きる意味」を見出す心理療法。フランクルが創案した。彼は、「価値」を創造（仕事や趣味）、体験（芸術的体験）、態度（その状況によってふるまう態度）の3つに分けた。不安や恐怖をもつことを逆にやってみる「逆説的志向」やいろいろと自分にこだわらずにやってみる「反省徐去」という技法もあげた。
- 16) フランクル；(1905-1997)オーストリアの医師。ログセラピーの創案者。ナチスの強制収容所での経験から「夜と霧」を書いた。
- 17) ソクラテス；(BC469-BC399)ギリシアの哲学者。「無知の知」（不可知論）や「汝自身を知れ」を説いた。弟子にプラトンがいた。人間は、「徳」（アレテー；善）を行うことが重要であるといった。彼の「問答法」は、今日の「対話法」に通じる。
- 18) 転機；他の状況に転じるきっかけをいう。予期せぬものか予期したものかによってその対処が異なる。キャリア心理学のシュロスバーク、N. は、①自分の能力や資産を知る、②状況を正しく知る、③支援者がいるかどうか、④対処の仕方；認知を変える、状況に合わせる、ストレス解消法はあるかなどの4点が転機を迎えた場合に考えていく点であるといっている。
- 19) アリストテレス；(BC384-BC322)ギリシアの哲学者。プラトンの弟子、論理学、倫理学、自然、生物学など「万学の祖」といわれる。今日の3段論法は、彼が唱えた。また、「哲学」（知を愛する学）という語も彼が唱えた。
- 20) アウグスチヌス；(354-430)ローマ帝国時代の神学者。「神の国」と「地の国」の2つを論じた。罪を犯したことの「告白」という書は、よく知られている。
- 21) トマス・アキナス；(1225-1274)イタリアの神学者。哲学と神学（キリスト教）の統合を行った。「神学大全」は、著名である。
- 22) パスカル；(1623-1662)フランスの哲学、物理、数学者。「パスカルの定理」で知られる。「哲学を馬鹿にすることが哲学である」といい、「懐疑論」を唱えた。デカルトほどは「神」を信じなかった。
- 23) 窮地；一瞬の判断が問われる事態をいう。英語では、predicament, scrape という。どうしようもない事態、逃げ出せない事態、苦境に立たされた事態、危機的な事態をいう。一般に戦争がない限り、このような事態は、人生で1～2度しか経験しないという確率論がある。
- 24) プロタゴラス；(BC490-BC420)ギリシアの哲学者。「徳の教師」として生きる。弱論強弁の論法でヒトの弱さや個性を尊重した。
- 25) カント；(1724-1804)ドイツの哲学の大学教授。理性、悟性、感性、判断力の「認識論」を確立した。「経験」と「理念」の中間に「判断力」があるととらえた。日常からまじめで探求心・考察に熱心であり、わが国の徒党を組みやすい心理学者とは物事に取り組む姿勢が大きく異なる生き方をした。



- 26) ヘーゲル；(1770-1831)ドイツの哲学者。哲学、法学、キリスト教学を探究し、彼の「論理性」は、優れたものであった。しかし、言葉が難解で哲学者でも解読しにくい点があった。のちにキルケゴールやマルクスが影響を受ける。
- 27) フランシス・ベーコン；(1561-1626)イギリスの哲学者。哲学以外に政治にも関心を持ち、「経験哲学の祖」といわれる。「イドラ」（幻像）論を唱え、今日のヒトのもつ「偏った認知」についてふれている。ロジャー・ベーコン（1214-1294）は、哲学のみならずユリウス暦やアラビア科学にも関心を示した。
- 28) ロック；(1632-1704)イギリスの政治哲学者。「自由主義の父」といわれる。フランスの人権宣言やアメリカの独立宣言に大きな影響を与えた。
- 29) ヒューム；(1711-1776)イギリスの哲学者。知覚は、印象と観念からなるといい、「理性は、感情の奴隷である」といった。また、「因果関係」について論理的に明らかにした。
- 30) デカルト；(1596-1650)フランスの数学者。「近世哲学の祖」といわれる。文科系の「哲学」を嫌い、もっぱら数学と物理学を探究した。「慣性の法則」を示したことは有名で、「神の存在証明」を数式で示した。
- 31) 弁証法；古代ギリシアから始まった。2つの対立するものを互いに否定せず、論議し合ってまとめていくことをいう。ヘーゲルの弁証法は、あまりに理念的だとマルクスは批判し、唯物的弁証法を唱えた。エンゲルスは、①量から質へ、②対立しながらの相互浸透、③否定の否定をあげた。
- 32) 重層的決定論；ある結果を引き起こす複数の原因が同時に存在する事態をいう。フロイドが、夢の解釈をするために夢は、圧縮や転移などが働いて重層的に決定されるといった。フランスのアルチュセール、L.P.は、社会構造の展開についてこの論を用いた。つまり、古代は、「奴隷制」が決定因で支配因は「政治」であったといい、マルクスもヘーゲルも社会を単層的、一元的にとらえていると批判した。
- 33) マルクス；(1818-1883)ドイツの経済学者。科学的社会主義の提唱者。若い頃よりフランスやイギリスに亡命している。「資本論」は、彼の集大成。今日の社会主義や共産主義の基盤を論じた。
- 34) ゲシュタルト心理学；ゲシュタルトとは、ドイツ語で「形態」という。20世紀の初期にドイツで始まった心理現象を全体性をもったまとまりのある構造としてとらえる心理学。それまでの構成要素でみていく心理学とは異なる。知覚心理学や社会心理学に影響を及ぼした。ヴェルトハイマー、コフカ、ケーラー、レヴィンが代表とされる。
- 35) ソシュール；(1857-1913)スイスの言語学者。「近代言語学の父」といわれる。ラング（社会的共通語）とパロール（個人的な言葉）、シニフィアン（声と音）とシニフィエ（概念）とに分けて言葉の機能を分析した。また、「言語相対論」を唱え、文化によってその言葉のもつ言葉の価値が違うといった。のちにレヴィ＝ストロースに影響を与えた。
- 36) レヴィ＝ストロース；(1908-2009)フランスの人類学者。「構造主義の祖」といわれる。アメリカの先住民文化やアジアの親族構造の研究をして、白人優勢の文化を批判し、サルトルの実存主義とも対決した。
- 37) デリダ；(1930-2004)フランスの哲学者。「ポスト構造主義の祖」といわれる。既存の文章やその意味について「構造化」されていると批判し、エクリチュール（書かれたものをもう一度見直す）や声を重視し、「構造」を見ていくなからその発生をとらえるべきだといった。
- 38) 脱構築；デリダが1960年代に「精密読解」を始めたことによる。不定形を受容することが、脱構築である。

- 39) ポスト構造主義；古典的隠喩、主題、合理性を否定し、言葉を中心とする「構造主義」に疑問を抱き、それが「全体主義」や「父権性」の肯定につながるととらえた。1980年代のフランスに始まり、デリダ、フーコー、ラカンなどが代表とされる。内容としては、20世紀前半の芸術分野の「ポストモダニズム」と変わりはない。
- 40) 診断；医師が病状を判断することをいう。本来、「区別して知る」という意味であった。心理士は、診断ができないが臨床心理士の資格ができて「心理的アセスメント」という語を用いるようになったがそのマニュアルや基準はない。心理士は、安易に診断名の流行を追いやすく、例えば、「発達障害」という語が流行したらそれに注目しやすい。「診断」は、「治療」とつながらなければ患者（クライアント）のレッテル貼りに過ぎない。
- 41) 無条件；ロジャースが、クライアントと関わる際、価値観や偏見をもたず、無条件に関わることを強調した。それに加えて治療者の「共感」と「純粋性」が、クライアントのパーソナリティ変化の必要十分条件であるといっ
- た。
- 42) ウイリアム・ジェームス；(1842-1910)アメリカの心理学者。プラグマティストでありながらも超常現象にも興味を示した。時代的には、ドイツのヴィントよりも早く心理学の講義をした。
- 43) 機能心理学；構成心理学に対して、意識を生体の環境への適応手段とした機能を重視する心理学をいう。アメリカのウィリアム・ジェームスが開発した。ダーウィンの「進化論」が基盤となっている。
- 44) デューイ；(1859-1952)アメリカの哲学・心理学・教育学者。スタンレー・ホールから心理学を学ぶ。プラグマティストでウィリアム・ジェームスの師。問題解決学習を提案した。
- 45) プラグマティズム；ドイツ語の「実用主義」という語から始まる。イギリス経験論の影響を受けて、アメリカで1870年から1874年までに広まった。1910年にウィリアム・ジェームスが「プラグマティズム」を書き、20世紀には、デューイが教育界に広めていった。
- 46) ベルグソン；(1859-1941)フランスの哲学者。1927年にノーベル文学賞を授与している。「直観」を重視し、時間の持続について哲学的に説き、失語症者を介して「イマージュ」の機能を説いた。晩年には霊などについての「神秘主義」に走った。
- 47) アンティステネス；(BC446-BC366)古代ギリシアの哲学者。キュニコス派に属する。アリストテレスは、彼を利口な人とはとらえなかった。マルクスアウレリウスの「自省録」では、善をなしながら自分を粗末にする彼を称えている。
- 48) ゼノン；(BC35-BC263)ストア派に属する。ストアという場で講義をしたためストア派という名がついた。
- 49) エピキュロス；(BC341-BC270)エピクロスともいう。「平静な心」を勧め、友情、健康、食事さえあれば「幸せ」になるといった。「幸せ」が、人生の目的であり、ストア派のいう「幸せ」は、結果であるという考えと逆をいう。また、「快樂主義」と誤解されやすく欲望の執着についてはとくにふれていない。
- 50) 煩悩；心身を乱し悩まし、智慧を妨げる心の動きをいう仏教用語。除夜の鐘を108回つくのはヒトの煩悩が108種あるからだという。
- 51) 中庸；儒教の「四書」の中の過不足なく偏りのない「徳」をいう。古代ギリシアのアリストテレスは、中庸を「メソテース」といい、両極端の中間を知る「徳」が「思慮」（実践知）と説いた。「メソテース」を英語では、golden mean という。

- 52) 自己開示；相手と親しくなるために自然と自分の個人情報を話すことをいう。アメリカの心理学者ジュラードが、名付けた。自己顕示は、相手に認められたいために意図的に自分を示すことをいう。心理療法の場合には、社会心理学でいう互惠性 (give and take) の自己開示ではなく、治療者の自己開示は少ないほうがよいが、わが国の心理士の場合、自己顕示が目立つ。
- 53) 自己実現；自己の能力・個性を社会で実現することをいう。脳学者のゴルトシュタインが、最初に名付けたが、経済学者のマルクスも用いており、心理学では、ホルネイやマズローが用い、ユングのいう「個性化」とどのように違うかは明確ではない。今日では、マズローのいう自己実現がよく用いられている。
- 54) 欲望；英語では欲望を desire, greed といい、願いは、wish, 要求は、need という。煩惱の3毒とは、貪欲、感謝の気持ちもなく不満をいう、不満で怒りをぶつけることをいう。フロイドは、ヒトの無意識世界には「エロス」（生の欲望）と「タナトス」（死・破壊の欲望）が潜んでいるといった。
- 55) 行動の科学；ヒトの行動を科学的に研究し、その法則性を確立しようとする学問。心理学、社会学、精神医学などが含まれる。心理学では、アメリカのワトソンが1913年に行動の心理学を提唱し、アメリカのスキナーは、1970年頃より「習慣」行動に関して行動分析学を始めた。このことから、現在でも心理学ではヒトの心を扱わず、行動を扱っている。唯一、「臨床心理学」だけが直接、ヒトの心を扱っている。
- 56) 社会構成主義；とくに21世紀になって登場してきた「人間関係が現実をつくる」という主義をいう。ポストモダニズムの源泉である。これまでの臨床心理学、社会心理学、社会学に影響を与えた。この考えから、例えば、フロイドのいう「自我」という固定したものやユングのいう「自己」という固定したものがあるかという疑問やエリクソンのいう「アイデンティティ」といった固定したものがあるかという疑問も生じてくる。つまり、これまでのこれらの概念があるという前提で論じてきた本質主義の否定である。他者との「対話」によって自分が変化し、ヒトの心は、流動的であるという前提がある。
- 57) デュルケーム；(1858-1917)フランスの社会学者。経験科学としての社会学を確立し、個人外の社会的事実を取り上げることがを主張し、今日の社会学の基盤をつくった。とくに自殺論やアノミー（社会混乱）で知られている。
- 58) ナラティブ・セラピー；1980年代から始まった社会構成主義に基づく療法。治療者とクライアントの対等性、クライアントに自主的、自由に語らせる、語るクライアントの物語を新たなものにして再構築していくことを目指す。「本質」や「客観的事実」を重視せず、問題を問題としなくなることを目指す。従来の心理療法をゼロにして始めなければ混乱を招く。
- 59) ヴィットゲンシュタイン；(1889-1951)ウイーンの哲学者。イギリスの大学で教鞭をとっていたが癌で早く亡くなる。言語哲学を探究し、「語りえないことは沈黙すべき」といった。「言語ゲーム」論や古代哲学者が用いてきた言葉の誤りや難しさを指摘し、日常生活での言葉とその文脈を強調した。
- 60) ラカン；(1901-1981)フランスの精神科医・哲学者。精神分析をフランスに紹介し、彼なりの流派をつくった。ポストモダニズムの思想をもち、生後6か月から12か月の乳児の「鏡像段階」（鏡を見て自己イメージをつくる）をあげ、「去勢」なくして言語の活動はあるえないといい、心の象徴界、現実界、想像界の機能を説明した。
- 61) ピアジェ；(1896-1980)フランスの発達心理学者。認知発達について乳児から中学生までの4段階をあげ、「保存」の概念、「模倣」、「・・・ごっこ」など発達で重要な点を指摘した。また、今日、彼がいう幼児期の「自己中心性」の

特徴は、保育者にとって参考になっている。わが国では、英語教育が中学時より始まるのはピアジェのいう「形式的操作の時期」が根拠にあるといわれている。

- 62) ヴィッゴツキー；(1896-1934) ソ連の心理学者。弟子にルリアやレオニチェフなどがいる。唯物弁証法（欧米のそれまでのブルジョアによる心理学研究の批判）に立ち、障害児教育や知能、言葉の発達に打ち込んだ。今になって彼の死後、業績が認められてきている。例えば、ピアジェは、幼児期の独り言から次第に他者と交流ができる言葉の発達を示したが、ヴィッゴツキーは、最初の「内言」の発達時から他者に何を伝えるかを模索していることを実証し、その後、「外言」として正しく他者に表現しようとする発達を論じている。
- 63) 社会性；ヒトが、集団を作って生活をする傾向や特質をいう。家庭、学校、地域、職場、国家などの集団形成において重要である。本能的なものというらえ方と学習によるものというらえ方がある。現代の青年の特性として、不登校やひきこもりなど社会性の欠如があげられ、道徳教育、親子関係、交友関係のあり方をもう一度見直す必要がある。
- 64) ヤスパース；(1883-1969) ドイツの哲学者・精神科医。「限界状況」（死に直面する、罪を犯し悩む、苦痛の極限）にヒトは、直面し、神や親愛なる他者と関わりをもち、自己存在が確認できるという実存主義を唱えた。精神医学では、記述精神医学を唱えた。
- 65) ハイデッガー；(1889-1976) ドイツの哲学者。実存哲学、農村、世界、公共、集団主義など広く、深く個と世界を探索したことから 20 世紀を代表する哲学者として知られる。現象学的方法で存在と存在者とを区別し、存在の意味、存在の時間、存在の場所について考究した。また、「世界内存在」（精神内界）と外界に活動する「現存在」の2つの側面から存在を論じた。
- 66) das man；ハイデッガーが述べた語。非人間と訳す、つまり没个性的で顔の見えない集団の一人という意味がある。ハイデッガーは、「現存在」に「投企」（命を懸けて打ち込む）するヒトの姿を尊んだ。
- 67) キルケゴール；(1813-1855) デンマークの哲学者。これまでの抽象的な「実存主義」に対して、自らの体験（婚約破棄事件や父親がもつ罪を知ることなど）に基づく個別的、具体的事実からの「実存」を唱えた。ヘーゲルの「神」に委ねた実存を否定し、デンマーク教会とも論争した。
- 68) ホスピス；ターミナル（終末）ケアの施設をいう。ホスピスの語源は、中世のヨーロッパで旅人が教会に宿泊していたことをホスピスといったことに始まる。旅人の心身の病を教会の聖職者が「献身」的に看護したことから、「ホスピタリティ」（献身）とう語ができ、後にホスピタル（病院）という語になった。わが国でのホスピスの始まりは、1973 年（昭和 48 年）といわれている。
- 69) サルトル；(1905-1980) フランスの哲学者。無神論実存主義者であり、3 歳時に右目を失明し、青年期にうつ病になっている。ノーベル賞受賞を拒否し、レヴィ＝ストロースとは、構造論に反対し、カミュとは、共産主義について論争し、マルクスの考えを称賛した。「即自存在」という存在が先で本質が後という実存主義を唱えた。日本の学生運動に影響を与えた。
- 70) カミュ；(1913-1960) フランスの小説家。「異邦人」の作品は、著名である。1957 年にノーベル文学賞を授与している。1960 年に交通事故で死亡。一貫して扱ったテーマは、人生の「不条理」である。彼は、神や権威あるものに頼ることなく、「不条理」と闘うことを説く。実存主義や共産主義を嫌い、社会革命の限界を示唆したことは、現在に通じる点がある。

- 71) 不条理；「不合理性」をいう。実存哲学では、人間存在の絶望状況をいう。カミュは、「神」を全面否定しなかった。「議論の余地がある」といっている。キルケゴールは、聖書の「沈黙のヨハネ」についてふれ、不条理に悩み、ヒトは、「哲学的自殺」（神を妄信する）で救われることもあるといっている。裏社会、裏取引で動くわが国においては、「不条理」と闘うことも重要であるが、「哲学的自殺」も生きる意味を見出すのではなかろうか。
- 72) ニーチェ；(1844-1900)ドイツの哲学者。音楽家ワグナー、ザロメと親しくし、ショウペンハウエルを尊敬した。1880年代、産業革命や個人主義が台頭し、ニーチェは、「神は、死んだ」といった。同時期、芸術も退廃し、これを「デカダンス」といった。様々な大学で教鞭をとっていたが無国籍となる。晩年は、統合失調症になる。彼のニヒリズム（虚無主義）は、現在の青年の一部に当てはまる。「神」の存在について、ヨーロッパでの魔女狩りが、約300年も続き、ローマ帝国でキリスト教が約1000年も国教となった歴史をみると単に政治的背景のみで「神」の存在を信じるのが長期続いたとはとらえにくい。この時間の長さから何らかの「真理」がみえてくるのではなかろうか。
- 73) ルサンチマン；ニーチェが、弱者が強者に対して憎悪、怒り、妬みをもつことをいった。弱者は、「神」にすがり救いを求めるが、ニーチェは、むしろ強者に立ち向かい、自ら強くなる努力をすべきであるといった。今日、芸能スキャンダルが注目されるのは、自己顕示に価値を置くこのルサンチマンのせいではあるまいか。
- 74) 超人；ニーチェは、生活の保証、平安、安楽を求める大衆を「蓄群」といって侮った。むしろヒトは、永劫回帰に優れた人間になろうと可能的極限に到達すべきであると説いた。このようなヒトを「超人」といった。
- 75) 志向性；フッサールが、意識は常に何かに意識していることを志向性といった。ブレンターノは、各個人の価値観によって志向性が異なるといった。フロイドは、リビドー（心のエネルギー）の「充当」ととらえた。無気力とは、何も志向性がない状態ととらえられる。ヒトは、充足し、価値観をもたないならば無気力になりやすい。
- 76) ブレンターノ；(1838-1917)オーストリアの哲学・心理学者。意識の「志向性」について作用心理学を確立した。「志向性」とは、心理学の「注意」の意味に近い。外界の刺激を知覚から認知し、感情を生じさせるには意識の「志向性」が大きく影響しているといった。
- 77) キャリア；個人が生涯にわたり仕事や諸活動を行っていく経験の過程をいう。運ぶ（carry）、運ぶもの（carrier）、到達する（career）に語源がある。日本語にはない言葉。2002年、当時の文部大臣が、突然、「キャリア教育」の推進といったことから、この語が波及した。従来、わが国では、学力に基づく進路指導が主であったが、長い人生を通じた職業や能力の開発に注目し始めた。
- 78) クリティカルシンキング；批判的思考と訳す。単に批判するのではなく、当り前のことを疑い、客観的にものごとを考えることをいう。論理的思考とも関係する。アメリカでは、デューイが1930年から中卒・高卒の青年のためにこの考え方を勧めた。2014年には、オバマ大統領がわが国の大学生にこの考え方を強調した。しかし、わが国の場合、基礎学力の低下や学業意欲の低下の方が、目下の現実的問題であると思われる。
- 79) レヴィナス；(1906-1995)フランスの哲学者。「他者論」（自分の通りにならない他人的な特性）を唱えた。自分が死んでも「他者」はいつまでも存在し、いつまでも「他者」の正しい正体がわからないゆえにヒトは、「自己」を問い続けなければならないといった。また、ヒトの「顔」について考察し、「顔には神の言葉が宿っている」といった。このように「他者」の「存在」を「イリヤ」という語で考察している。心理臨床界の幹部の「顔」をみて「神の言葉」が感じられるだろうか。

- 80) イリヤ；ドイツ語の「・・がある」は、es gibtであり、es(it)は、神を意味し、gibtは、与えるを意味する。このことから、ハイデッガーは、「ある」という語には贈与してもらうことの感謝の意があるという。しかし、レヴィナスがいうフランス語の「・・がある」は、(イリア)ilyaであり、ナチスによる街の破壊によって生き残った自分と破壊された誰もいない町を見て、まだ「ある」という深い意味がある。そこには、親や故郷が、「剥奪」された悲しみや沈黙だけの暗い闇の恐怖がある。その時、レヴィナスは、自己存在の責任と「他者」への責任を感じたという。わが国でも被爆地の悲劇や被災地の悲劇を聞いたり、戦争中に青年特攻隊員が、犠牲になって4000名も亡くなった事実を聞けば、安直に自殺を考えたり、感情的になって他者を殺害したりはできないのではなかろうか。
- 81) ホッブス；(1588-1679) イギリスの哲学者。「リヴァイアサン」を書き、人工国家理論を唱えた。国家は、「権威」をもつべきであり、全体主義、専制主義、独裁主義を肯定した。ルソーやロックは、この考えに反対した。
- 82) フロム；(1900-1980) ドイツの精神分析家・哲学者。アメリカに渡り、新フロイド派をつくった(神経症の文化・社会的影響を強調する学派)。「自由からの逃走」を書き、権威にすがらず共産主義を信じ、生産が幸福をつくるという。また、「神経症」(ノイローゼ)の本質は、権威に頼る点、依存的である点、サディズム、マゾヒズムが、問題であるといった。フロイドの女性蔑視にも批判的であった。
- 83) 全体主義；初めて「全体主義」といったのは、イタリアのムッソリーニといわれている。フリードリッヒは、①単一イデオロギー②イデオロギーに傾倒した大衆政党、③秘密警察、④武器とマスコミの独占的統制、⑤全経済の中央からの統制によって全体主義が成立するといった。アーレントは、1951年「全体主義の起原」で全体主義は、「大衆」を対象に「より正しい考えであること」を一貫して信じさせ、「テロル」(敵対者の威嚇)も行って「種族的ナショナリズム」を成立させればできるという。この考えは、戦前の日本や日本人のもつ群集心理傾向にも当てはまる。
- 84) アーレント；(1906-1975) ドイツの女性の哲学者。ヤスパースやハイデッガーとも交流があった。1941年にアメリカに渡り、「全体主義」の探究をした。
- 85) 闇の人事；アメリカの「キャリア」論では、能力主義と適正によって職業が決まりやすいが、わが国では、学閥、地縁、血縁、「コネ」、「根回し」などによって職業が決まりやすい。とくに臨床心理学分野の教員人事は、飲酒などを媒介とした非公式場面で採用されやすい。したがって、応募してもすでに決めたうえでの人事が多い。若い大学院生にとってこのことがわかれば研究意欲はなくなるであろう。このような方法は、慎んでいただきたい。
- 86) ローレンズ；(1921-2002) アメリカの哲学者。第2次大戦で出兵している。原爆投下を批判している。彼の哲学は、公共的理性の実現、つまり「正義」の実現についてであった。正義とは、共同体の秩序維持に関する規範的要請をいう。プラトンは、正義は、節制、勇気、知恵のバランスといい、アリストテレスは、①配分的正義；能力に応じて地位や財産を配分できること、②矯正的正義；配分を是正したり、相互交渉でバランスを実現することの2点の正義をあげ、ローレンズは、アリストテレスがいう正義を社会制度によって実現すべきであるといった。「正義」の内容について、プラトンやアリストテレスは、ヒトのもつ「善」とし、ローレンズは、「福祉国家の実現」、また、オーストリアの経済学者ハイエクは、「秩序の維持」ととらえている。日本人の場合、集団主義に走りやすいことから「正義」を質よりもハイエクの「秩序の維持」ととらえやすいのではなかろうか。つまり、何も考えず皆がそういうから「正義」とみなしやすいのではなかろうか。
- 87) 無知のベール；ローレンズがいった言葉。地位やその人の立場を全く知らずにいる状態をいう。ローレンズは、その人の才能、性格、財産、信条など知らない白紙からスタートしないと公正で平等な社会秩序を維持する法律はできないと

- らえた。このことから、「正義」を維持する集団（国家や公的団体）の幹部によるアリストテレスがいう「矯正的正義」の対応についてプラトンのいう「善」の心がなければ困難であることがわかる。
- 88) サンドル；(1953-)アメリカの哲学者。ハーバード大学の教授。ドイツのハーバーマスと交流が深い。「共通善」、つまり、アリストテレスがいった「共通の利益」に近い意味の政治社会全体の「善」を目指す「共同体主義」（コミュニタリアニズム）を唱えた。「共同対主義」にも自由主義派、ラディカル多元派、公民派、統治共同体派の4派がある。ロールズは、「性善説」で個人の自由を強調したが、サンドルは、「性悪説」でまず「集団の秩序」を重視している。
- 89) ハーバーマス；(1929-)ドイツの哲学者。「公共性論」で著名。東西ドイツが統一される時、全ての人間に通じる憲法を制定すべきという「憲法パトリオティズム」を唱えた。封建的公共権（上から与えられた公共権）に反対して、生活世界の合理化を目指す「コミュニティ行為」を具体的に示した。
- 90) アイデンティティ；1950年から1990年までに青年心理学で用いられた語。日本語にはない。主体性、自己存在証明、自我同一性などと訳す。エリクソンは、青年期の発達課題としてアイデンティティの確立をあげた。20世紀の後半にロシアでの「ペロストロイカ」が生じ、イデオロギーも重視されなくなり、社会も流動的になったことから、この語の意味は薄れた。同時に青年心理学も低迷してきた。
- 91) 松果体；「しょうかたい」と読む。内分泌器。間脳の一部でホルモンやメラトニンをつくる。性機能や新陳代謝に関わるといわれている。
- 92) トランスパーソナル心理学；トランス（超える）は、個人を超えてという意味がある。自己実現を唱えたマズローやロジャースの「人間性心理学」に「ユング心理学」を融合している。1960年代のアメリカでの学生運動や仏教やヨガなど東洋思想への関心から始まり、死後の世界、宇宙空間、母体回帰、前世などの超常現象も扱う心理学。わが国では盛んではない。
- 93) ジン；(1944-)アメリカの心理学の大学教授。宗山行願から禅の指導を受け、瞑想とヨガを組み合わせる「マインドフルネス」を開発した。ストレスの低減や免疫の強化に効果があるという。
- 94) マインドフルネス；ジョン・カバット・ジンが、創案した方法をいうが、「マインドフルネス」の意味は、「今を大切に生きる生き方」という意味が本来の意味である。リラクセス法の「自律訓練法」とは異なり、瞑想やヨガによって全てのストレスや悩みを受容でき、仏教でいう「丸くなる」ことを目指す。その意味で「森田療法」の「あるがまま」に通じる。目の前に新しい心理療法があれば安易に飛びつくのが、わが国の心理士や一般市民、及び臨床心理学教員であるが、1) で述べたようにこの世に魔法の心理療法はなく、マインドフルネスも「訓練」の1つに過ぎない。何事も本物をマスターするのであれば単純ではなく、血の出るような努力が必要である。
- 95) クラーゲス；(1872-1956)ドイツの哲学・心理学者。科学的筆跡学の創始者。また、精神の「リズム」についても研究した。
- 96) ムンテラ；日本の医師の用いる略語。医師が、患者や家族に病気の説明その治療を言葉でいうことをいう。Mund Therapieの略語。Mundとは、「口」をいう。今日、大学の医学部精神科で「精神療法」を専門とするコースは少なく、また医学部で以前のような専攻をしていても即座に「精神科医」を名乗ることができることについては知られていない。

- 97) 治ること；治ることとは、元の健康な状態に戻ることをいう。イギリスの心理学者アイゼンクによれば、心理療法の効果は、神経症で10人中3人といわれている。7人は、「自然治癒」といわれている。わが国の心理士が、不登校生徒を登校できるようにした例は非常に少ない。
- 98) デュルタイ；(1833-1911)ドイツの哲学者。精神史の研究をした。彼の心理学を心的行為を精神全体の分節としてとらえようとする「了解心理学」と呼ぶ。のちにヤスパースやハイデッガーが彼の影響を受けた。
- 99) 分析心理学的心理療法；スイスのユングが開発した心理療法。無意識にある「自己」の実現を「個性化」と呼び、「個性化」を目指す心理療法。主に「表現」が中心で「夢」、「描画」、「箱庭」、「コラージュ」などを媒介に無意識にある内容を「表現」させる。日本では、普及しているがアメリカではこの療法はあまり知られていない。
- 100) コント；(1798-1857)フランスの社会学者。「社会学の祖」といわれる。三段階の法則をあげ、社会は、神学から形而上学にして科学に発展するといひ、政治は、軍事から法律、そして産業に発展するといった。彼の「心理学」批判は、「心理学」は、「生物学」にふくむべきとし、ヒトが「神」に至るための内観・内省は、科学ではないといった。
- 101) 形而上学；meta-physics と英語でいう。哲学の一部で感覚や経験を超えた世界に「本当のもの」があり、その普遍原理を思惟によって認識しようとする学問。唯心論の立場で「宇宙」や「自己存在」の起原を問う。アリストテレスが最初に「形而上学」と名付けた。「形而下学」とは、実体のないもの（例えば、霊）を追求する学問をいう。20世紀の前半、実証・科学主義が普及し、全て科学で解明できると思い込んだ時期もあったが、20世紀後半、数学や物理学での「不定・不確定」が実証され、科学主義も行き詰まった。形而上学が低迷した今日、形而上学とともに科学主義に洗脳されない人の心と直接、関わる「臨床心理学」も息を吹き返す時期ではあるまいか。
- 102) ガーゲン；(1935-)アメリカの社会心理学者。スワースモア大学の教授。社会構成主義の立場で心理現象をとらえた。デリダの「ポスト構造主義」の影響を受け、「言葉が、世界をつくる」といった。
- 103) 動物磁気；メスメルが、催眠術をかけた場合、かけた人からかけられた人へ流れる「液体」あるいは「力」を「動物磁気」といった。悪魔祓いをしていたガスナーの行為においても「動物磁気」が流れているといった。1784年にフランスの調査団が、調査した結果、「想像力」が働いて催眠が生じているという結論を出した。
- 104) ブレイド；(1795-1860)イギリスの外科医・催眠研究家。「近代催眠の父」といわれる。催眠は「暗示」作用によるという結論を出した。これまで催眠によって「透視」、「千里眼」、「読心」が可能といわれていたがブレイドによってそれらは否定された。わが国でも医学と心理学の分野で催眠療法学会があるが、催眠についてまだわからない点が多いという。
- 105) ジャネ；(1859-1947)フランスの心理学者。大学教授。思春期に「うつ病」になったという。シャルコーが師であり、無意識世界に関心を示し、自動書記、心的外傷による「解離」や「交代人格」などを探究した。同時期にフロイドが、精神分析療法を始め、フロイドの方が同じ無意識を探究して著名になったのは、フロイドは医師であり、ジャネは心理学者であったことやジャネは、遺伝的要因を強調したからであるといわれている。
- 106) シャルコー；(1825-1893)フランスの神経科医。「パーキンソン病」の病名をつけたことで知られる。催眠に関心をもち、「磁気理論」によって催眠を説明した。パフォーマンスが好きで大勢の人の前で催眠をかける場面を示した。そのわざとらしさから人々から不信の声が上がった。



- 107) ヒステリー；ギリシア語で「子宮」という意味の語。フロイド以前には、女性の特有な病ととらえられていたが、シヤルコーによって「心因性」のものとなり、フロイドは、「性」の「抑圧」によるものととらえた。転換性のものと解離性のものがあり、現在では、「身体表現性障害」、あるいは「解離性障害」と診断されている。
- 108) サリヴァン；(1892-1949)アメリカの精神科医。精神分析を専攻し、現代精神医学の基礎を築いた。主に「統合失調症」の心理療法を推進させた。また、自我の発達上で「前思春期」のチャム（親友）の存在の重要性を指摘した。
- 109) 関与しながらの観察；サリヴァンがいった心理療法における治療者の態度をいう。クライアントの感情や認知を「共感」する「関与」していく態度と同時に矛盾するが第3者としてクライアントを客観的に「観察する」という態度をいう。相当な臨床経験が必要なことから、実際にはこのことを実践できる臨床家は、わが国には少ないであろう。
- 110) 黒田正典；(1916-2009)わが国で「筆跡心理学」を確立した。児童心理学にも貢献し、「第6感」の研究も行った。
- 111) 主体的変容認識；心理療法での治療者の「逆転移」（個性）の問題は、フロイド以来、大きなテーマであった。弟子のフェレンツィは、むしろ治療者の逆転移を重視した。黒田は、心理療法過程でクライアントともに治療者も自我の変容があることを指摘して、「主体的変容認識」という語を用いた。
- 112) 心的現実；その人にとっての心理的、体験的現実をいう。フロイドは、客観的現実と区別をし、神経症は、この心的現実によることが多いといった。今日の認知行動療法での認知の偏り、認知の歪曲は、クライアントの心的現実である。哲学では、客観的現実もその存在を問い続ける。
- 113) 適応；臨床心理学では、重要な概念である。適応とは、環境に適合し、しかも単に生存を維持することではなく、主体的に環境に働きかけていく営みをいう。順応とは、個人の機能や状態を受身的に外的条件に応じて変化させることをいう。主体性が乏しい日本人は、適応を順応と間違いやすい。
- 114) 元型；ユングがいった無意識世界の様々なイメージをいう。「アニマ」（女性性イメージ）、「アニムス」（男性性イメージ）、「老賢者」、「太母」（グレートマザー）などがある。
- 115) EBM；根拠のある医学を意味する。1991年にカナダの医師グヤットが唱えた。良心的、明確で最良の医学を目指して唱えた。この影響もあって、ここ20年間のわが国の臨床心理学者は、実証・実験心理学者の臨床心理学へ転換する者が多く、また、認知行動療法の世界的流行もあって「臨床経験」よりも「科学的根拠のある実証研究」や行動療法がとにかく重視され始めた。身体医学での治療の根拠と心の治療での根拠は質的に異なるのではないかと思われる。
- 116) 前田重治；(1928-)精神科医。わが国の精神分析のパイオニア。心理臨床にも教育活動をし、臨床心理士を育成してきた。
- 117) 実証・実験心理学；主に社会心理学・学習心理学・青年心理学など「統計」を用いて心理的データを解析し、仮説を実証する心理学や行動・動作療法を専攻し、実証的データを集める心理学をいう。一部の实証・実験心理学者は、臨床心理士の資格ができるまでは「臨床心理学は、心理学ではない」と主張していたが、その資格ができると臨床心理学に転換し、組織の幹部を目指した。心理学者の研究テーマの心変わりとは、昔から医師によって批判されてきた。
- 118) グリュンバウム；アメリカの科学哲学者。ドイツからアメリカに渡ってピッツバーグ大学科学哲学センター長になった。1960年代には、「空間」や「時間」の哲学を、1970年代から1980年代までフロイドの精神分析についての哲学的批判をしてきた。

- 119) ライプニッツ ; (1646-1716) ドイツの哲学・数学者。全ての学問を統一した「普遍学」を試みた。「モナドロジー」(単子論)で著名。数学では、微積分法や2進法を開発した。晩年には、中国の「自然」観の研究や現在の「パソコン」のようなものの制作に取り組んだ。
- 120) 可能世界 ; ライプニッツが、最善世界の説明のために用いた概念。論理的に想定可能な世界をいう。この概念は、1960年代以後、カルナップらによって「様相論理」(必然性や可能性を論理的に研究する)論へと展開された。幻想・理想は、現実よりも価値があるのではなかろうか。